

資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2008-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008134



精霊たちのフロンティア

－ ガーナ南部の開拓移民社会における
＜超常現象＞の民族誌

石井美保 著



呪術化するモダニティ

－ 現代アフリカの宗教的实践から

阿部年晴・小田亮・近藤英俊 編

多くのアフリカ諸国の人々にとって、呪術は日常生活の一部である。予期しない不幸や近親者の突然の死に直面したとき、人は呪術を疑い、祭祀やさまざまな宗教実践によってこれを乗り越えようとする。

本書はガーナ南部における呪術や宗教実践と日常生活との関係を、長期のフィールドワークに基づいて詳細に明らかにした本格的な研究書である。内容は大きくは3部構成になっており、第Ⅰ部では調査地域における宗教実践の実態が、第Ⅱ部では日常生活と呪術の関係が、第Ⅲ部では超常現象と人間の交渉が、それぞれ分析されている。

著者が本書で明らかにしようとしているのは、呪術・祭祀・宗教実践などの「超常現象」そのものではない。むしろそれらに現出する人々の苦悩、欲望、願い、利害関係と抗争が著者の注目するところであり、「異界からの光が照らしだす日常世界の実践的論理」(p.284)の解明が本書の目的である。そのために著者は、ミクロな場面での親族政治、土地抗争、民族間関係の実態などを明らかにするだけでなく、植民地期から現代までガーナ南部の地域が経験してきた社会経済変化、さらには西アフリカを横断する遠隔地交易と呪術的要素の流通など、地理的・歴史的広がりのある考察を展開する。

評者が特に感銘を受けたのは、ココア生産および土地にまつわる抗争と呪術の関係を考察した第Ⅱ部である。土地をめぐる権利関係の詳細な実態分析を、母系・父系の親族関係、移民社会における民族間関係、ココア生産の歴史的拡大とそれともなう格差の顕在化と結びつけて論じる著者の考察は、この分野の研究の深化に大きな貢献をしている。

宗教人類学に関心のある者のみならず、西アフリカの地域研究、歴史学、土地問題、農業問題に関わっている幅広い層の読者に有益な知識を提供してくれる良書である。

(高根 務)

近代社会を合理化と呪術的要素の払拭の過程としてとらえたのはウェーバーだが、妖術はサハラ砂漠以南のアフリカを調査対象とする人類学的研究では常に大きなテーマであったし、近年のアフリカでは妖術信仰が衰退ではなく逆に活性化しているとする見方も多い。後者については、現在の世界的なオカルトブームにも敷衍し、社会の流動化に伴う個人化とグローバル化する資本主義が生み出す格差拡大から説明する見方(「千年紀資本主義」論)もある。

本書は、こうした近代と妖術との関係をアフリカの事例をとおして考察しようとする論文集である。所収の論文は9編で、プロローグ、第一部(3編)、第二部(4編)、エピローグという構成になっている。

プロローグ、第一部、そしてエピローグの論文では、前述の千年紀資本主義論に批判的検討が加えられつつ、近代と妖術の関係をとらえ直す理論的な視座が提示されている。これらの諸論文の中では、文化や宗教現象の異種混淆は近代に限定されないこと、本来個人の生の瞬間性・個別性に対処する術である妖術や、その妖術をめぐる語りや実践を支えている想像が、後期近代の社会の流動化や個人化、現代資本主義のもつ投機性やギャンブル性と親和性を持つことが指摘されている。他方、近代との非連続性に焦点を当てた論文もある。そこでは、後期近代社会の妖術が、災厄によって露見する個人の代替不可能性を「国家」などの顔の見えない集団のアイデンティティの中に埋め込む役割を果たしていることが論じられている。

第二部は、ケニア、ベナン、タンザニア、南アフリカを事例とする論文からなる。ケニアの例では近代国家と妖術の相互侵触的な状況、ベナンの例では貨幣経済の論理を基盤とする信仰活動、タンザニアと南アフリカの例ではローカルな文脈におけるキリスト教の受容のされ方が考察されている。

最後に、本書がアフリカを事例としつつも、現代日本のスピリチュアルブームを照射する視点を提示していることも付け加えておくべきだろう。(岸 真由美)





モザンビーク解放闘争史
- 「統一」と「分裂」の起源を求めて

船田クラーセンさやか 著

モザンビークの植民地解放闘争を戦ったフレリモは、ポルトガルの搾取的な植民地支配の下で分断統治されていた人々の「統一」を目指していた。しかし、1975年の独立後、モザンビークは長引く武力紛争(内戦)に苦しめられることになる。1990年代に入ってようやく和平となり、複数政党制選挙が導入され、近年では経済成長も著しいが、モザンビーク社会の「分裂」は癒えることなく、むしろ深化し続けているようにさえ見える。本書は、モザンビーク社会の「分裂」の起源を、「統一」が目指されていた植民地解放闘争期にさぐる試みである。具体的には、解放闘争、独立後の武力紛争のいずれにおいても激しい戦闘の前線となった、ニアサ州マウア郡のマクア人社会の経験が中心的に検討される。フレリモと植民地権力の間でこの地域の人々をめぐる激しい獲得競争が行われ、その結果、人々がばらばらに引き裂かれ、社会構造が大きく変容したことが、その後の武力闘争、さらには和平後も引き続く「分裂」の起源となっているというのが本書の主張である。独立時に植民地権力側に残っていた人々が多く、先行研究では植民地支配の「コラボレーター」とのレッテルを貼られてきた彼ら、彼女らが、その実、精神的にはどちらか一方の陣営だけに属していたわけではないこと、いったんフレリモ側についてもそこにとどまるのが困難だった背景には、フレリモによる「解放」の限界が横たわっていたことが、人々の生々しい証言と数々の一次史料によって示される。

本文だけで600ページ近い大著である。マウア地方の歴史と社会構造(「伝統的権威」など)、冷戦や南部アフリカ情勢などの国際環境、そして植民地支配と解放闘争の経緯について、ときに過剰と思われるほど、微に入り細をうがった説明を読みすすむなかで、それらが「本筋」とどうからむのか、ときに見失いそうになることもあった。しかし、本書の「核」といえる、解放闘争期のマウアの人々の過酷な体験を綴った第5章に至ったとき、これを描くためにキャンパスに丁寧な地塗りを施していたのだと納得した。(牧野久美子)

東京 御茶の水書房 2007年 xxv+669+28p.



ロメオ・ダレール
- 戦禍なき時代を築く

ロメオ・ダレール・伊勢崎賢治 著

ロメオ・ダレールは、1994年にルワンダで虐殺が起こった際、国連平和維持部隊の司令官だった人物である。よく知られているように、国連平和維持部隊はルワンダで進行する虐殺に対して何もできず、数十万人を見殺しにした。帰国したダレールは悔恨から精神を病み、2000年には自殺未遂事件まで起こしたという。その後立ち直った彼は、母国カナダで上院議員を務めながら、国際平和の問題に積極的に発言している。

本書は、ダレールに対するインタビューを軸とするNHK-BSの番組を冊子化したものである。インタビューは、シエラレオネやアフガニスタンでDDR(武装解除・動員解除・社会統合)の責任者を務めるなど、平和構築に関して豊富な経験を有する伊勢崎賢治氏で、興味深い内容の対談となっている。

NHK-BSでは良質の番組が放送されることが多いが、こうした番組の冊子化は、意味のある試みだと思う。ダレールのインタビューには専門的な内容が含まれ、一般の視聴者にはやや難解である。しかし冊子体となった本書では、補足的なコラムも充実し、国際平和について考えるための優れた入門書に仕上がっている。自宅でBS放送を観ることができない私のような人間にとっても、本書はありがたい企画である。

ダレールの主張は、明快で論争的だ。彼は、ルワンダのように先進国にとって戦略的価値が低い地域での紛争解決に、ミドルパワーが積極的に取り組むべきだという。彼の言うミドルパワーとは、国連安保理常任理事国以外の「中堅国家」であり、日本もそこに含まれる。アメリカなど安保理常任理事国に国際平和の維持に伴う負担(と権限)を独占させず、役割分担をすべきだとの主張である。

この主張は、概ねカナダの外交的な立場に沿ったものである。日本はどうすべきか。伊勢崎氏は、現在の日本が同じ立場をとることに懐疑的である。立場はどうあれ、紛争解決や平和構築の問題について考えるために、本書が良い材料であることは間違いない。

(武内進一)

東京 NHK出版 2007年 93p.



アフリカン・ポップスの誘惑

多摩アフリカセンター 編

冒頭から、執筆代表者(八木繁美。昆虫学者でもある)のアフリカン・ポップスへの熱い思いに引き込まれる。伝統音楽ではなく、現代のアフリカの社会で愛されている曲を訳詞とともに紹介してくれているので、たとえ現地語がわからなくとも、アフリカン・ポップスの歌詞の面白さを味わうことができる。

本書は、2001年から2005年の間、雑誌『アフリカ』に連載された42編の原稿を加筆・修正し、新たに9編を加えてまとめたものである。執筆者は計8名。アフリカン・ポップスの翻訳家やタンザニアの歌謡を研究している研究者だけでなく、文化人類学者やアフリカ言語学者たちも執筆者として名を連ねている。

8章構成であり、第1章「みんなが知ってる名曲」、第2章「ケニア、タンザニア～コンゴ」、第3章「ターラブとタンザニア最新ヒット曲」、第4章「コンゴ～ケニア」、第5章「エチオピア、ケニアのローカルポップス」、第6章「南部アフリカ、マダガスカル」、第7章「西アフリカ」、第8章「フランコ・永遠の名曲」となっている(個人的には、エチオピア・ポップスの紹介はウォライタ・ポップスだけなのが残念である)。

「はじめに」にもあるとおり、各執筆者の現地の生活も併せて紹介するというコンセプトの下に書かれた各編は、単なる曲紹介ではなく、人々の生活に寄り添った形でのアフリカン・ポップスの存在を印象づけてくれる。また、アフリカン・ポップスがそれぞれの国ごとに孤立して存在するのではなく、リンガラを筆頭に互いに影響を与え合い、歌手もアフリカ各国を回ってコンサートを開くなど、国境を越えた広がりがあるのがひじょうに興味深い。

一点気になったのは、章立てのわかりにくさである。地域名を冠した章とテーマを冠した章が混在しているために、ケニアのポップスが章をまたいで繰り返し取りあげられるなど、わかりにくい構成になってしまっているのが残念である。

(児玉由佳)

横浜 春風社 2007年 190p.



スワヒリ語のしくみ

竹村景子 著

突然だが、この「資料紹介」というコーナーの制限字数は約800字と決まっている。そして、スワヒリ語を少しでも勉強された方ならもとよりご存知であろうが、日本のスワヒリ語研究の中で使い慣らされてきた文法用語はその緻密さをもって知られ、全部列挙するだけでこの限られた紙幅のほとんどを使い切ってしまうほどである。その上、スワヒリ語は名詞だけでも八つほどのグループ分けが必要になる。理解しやすい印象のあるスワヒリ語であるが、きちんと文法的に説明しようとするといやはや大変なことになるのである。通常は。

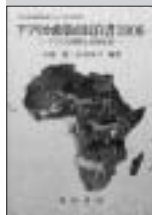
しかし、白水社の「寝ながら読める外国語！」シリーズの一つとして書かれた本書は違う。言語を説明する本でありながら、なんと初めてそれらしい文法用語が登場するのは46ページ目、しかも出てくるのは「母音」や「一人称」などごく基本的なものだけである。いくつもある名詞の各グループについても、「このグループ…は『薄くて細くて長いもの』がわりと多いです」(p.69。「髪」「虹」「板」の共通点はそれか!と、評者は目からうろこが落ちました)といった調子で親しみやすく説明される。それなのに、読者はだんだんと「彼のために朝食をつくってやった」ぐらいのことが言えるようになってしまうのである。

いったいどうやって読者にはなじみのない言語を、「主語」「名詞の活用形」といったかなり基本的なはずの用語さえ使わずに教えていくのか 明るく楽しい入門書でありながら、ページをひとつめくるたびに、「なるほど、こうやって説明するのか」と感心させる、スリリングで感動的な一冊である。挫折を乗り越える教訓の話(p.86)、未来のことを言うのをはばかり敬虔なイスラーム教徒の女性の話(p.91)など、ところどころに挟まれたエピソードも光る。スワヒリ語を学びたい人だけでなく、スワヒリ語にもう不便を感じない人や、広く言語全般に興味のある方にもぜひお薦めしたい作品である。

(津田みわ)

東京 白水社 2007年 144p.





アフリカ政策市民白書2006
- アフリカ開発と市民社会

大林稔・石田洋子 編著

TICAD市民社会フォーラム(TCSF)による白書第2号である。TCSFはアフリカの草の根の声を日本のアフリカ政策に反映させることを設立趣旨としており、今回の白書は、日本のODA事業を日本とアフリカの市民社会の視点から評価することに主眼をおいている。

第3章で現在のODA制度に対する問題提起がなされている。プロジェクトの実施や評価においてNGOなど市民社会組織の参加が認められるケースがあるが、そうした事例は少なく、また十分に意見が反映されていないと指摘している。続く第4章で日本のNGOによるODAの評価が示され、第5章ではアフリカのNGOによる評価が行われている。白書第1号での取り組みを踏まえて、具体的な事業を対象に3カ国のODAおよびNGOの事業が評価されている。第6章でTCSFによるODAの評価が提示され、第7章はそれらを踏まえた提言となっている。

援助事業をホスト国の市民社会によって評価したこと、またODAだけでなくNGOの事業も同時に評価したことは非常に興味深い。ODA制度を批判するだけでなく対案を示し実行したこと、またNGOプロジェクトと比較して評価したことについて、TCSFのアフリカ政策に対する誠実かつ建設的な姿勢が感じられる。この市民白書は、政府の批判者としてのNGOが、自らも批判、評価されることの必要性を意識して執筆されているように思われる。

評価方法や評価結果と提言の関連づけについては不十分な点も見られ、改善の余地があると感じる。しかし、このような取り組みの継続が、アフリカ開発における力強い市民社会の構築に役立つものと思う。

(福西隆弘)

京都 晃洋書房 2007年 xii+118p.



日本地理学会 海外地域研究叢書6
現代アフリカ農村

- 変化を読む地域研究の試み
島田周平 著

本書は、ザンビアの農業・農村について学びたい人だけでなく、地域研究の意義やフィールドワークの意義を再考したい人にも有益な一冊となるであろう。

全11章で構成される本書は、ザンビアのC村という一つの村で過去10年間に起きたさまざまな出来事を中心に据えながら、ザンビアの政治経済変化や森林破壊、人権やHIV・エイズ問題等、多岐にわたるテーマを論じている。また同時に、一つの村に焦点を絞るという独特な書き方を通じて、著者は、農村研究の意義とは何か、地域研究とは何かという疑問に対し答えを見い出そうと試みている。

評者は当初、C村の歴史を書き連ねるといって本書の独特の書き方に違和感を覚えた。しかし本書を読み進めるうちに、C村を中心に物事を考察するという筆者の試みにしだいに惹かれていき、あとがきに書かれた以下の文章(p.166)に深く納得した。「村で起きる出来事には必ずといってよいほど、多様な人間関係を通して他の思わぬ出来事へとつながっていく綾がある。『政治が農業生産に』、『開発が人権に』、『人権が村落政治に』、『病気が耕作方法に』、『政治の空白が森林破壊に』といった具合である。...(中略)...この点において地域研究に比較優位と醍醐味がある。」地域研究とは何か、という疑問に対する筆者の答えが、この文章に凝縮されているといっても過言ではない。

本書の第2章から第10章まではC村の出来事を中心に農村社会の変容について書かれているが、第11章ではその内容がガラリと変わり「C村の調査で考えたこと」について書かれている。ここでは調査結果の現地還元や参加型開発の難しさなど、他のフィールドワーカーも常日頃から悩んでいると思われる事柄について言及されている。普段、こうした問題について他者の意見を聞ける機会が少ないため、著者の考え方に触れることができることは、他のフィールドワーカーにとっても有意義な機会となるだろう。

(原島 梓)

東京 古今書院 2007年 iii+182p.



マラウイの小農
- 経済自由化とアフリカ農村

高根務 著

アフリカの農村について語るとき、私はこれまで「貧困」という言葉を使うことができるだけ避けてきた。開発言説の中で「貧困層」が語られるとき、それは「1日1ドル以下で生活する人」「基礎的社会サービスにアクセスできない人」といった、間違いではないが単純化されたイメージが先行するからである。

本書は世界で有数の「貧困」国マラウイの、農村世帯の生計を扱ったものである。世界銀行の統計によれば、マラウイの1人当たり国民総所得のレベルは206カ国中第201位で、国民の多くが貧困層であることは間違いのない。だが本書で私が試みたのは、このような統計数字では読み取ることのできない農村における「貧困」の多様な側面と、農村社会内部における貧困の偏在や格差の実態を明らかにすることである。

本書のもととなっているのは、マラウイ国内の6カ村でおこなった186世帯からの聞き取りデータである。これらのデータは、ミクロ経済学者から見れば統計的代表性のない一般化不能なものであり、人類学者から見れば地域社会の深い理解からはほど遠いもので、どっちつかずの中途半端な情報と見られる可能性がある。私があえてこの方法をとったのは、統計データのみからは読み取ることのできない地域の固有性や行動論理に光を当てつつ、異なる地域間に共通する農村世帯の生計の一般性を見出したいと考えたからである。本書でその試みがどの程度成功しているかについては、読者諸氏の判断を仰ぐしかない。

各章で取り上げたテーマは、政策史、土地、労働、農業生産、非農業活動、世帯間格差、女性世帯主世帯などであり、基本的な問題意識や研究アプローチは前著『ガーナのココア生産農民』と共通している。ただし今回は、いわゆるLivelihoods Approachを明示的に取り入れ、農業経営分析の基礎的な手法も一部導入することで、農村世帯の生計をより総体的に明らかにすることを目指した。40歳を超えてから新しい研究に取りかかるのは体力・気力の面で苦しかったが、この本を出版できて正直ほっとしている。(高根 務)

千葉 アジア経済研究所 2007年 230p.



統治者と国家
- アフリカの個人支配再考

佐藤章 編

統治者は、一個の生身の個人であり、制度的存在であり、シンボルであり、かつ神話でもある。このような多面性ゆえに、アフリカの統治者は豊かな可能性を秘めた研究対象であり、アフリカ政治の本質に迫る重要な切り口になるに違いない。このような狙いのもとに、2005年度から2年間にわたりアジア経済研究所で実施された「アフリカの個人支配再考」研究会の成果が本書である。

1982年にジャクソンとロズバーグが提示した「個人支配」概念の批判的再検討をベースとして、統治者研究の今日的意義を論じた第1章に続き、6篇の事例研究を収める。ナイジェリアの計8代の軍人指導者を対象とした個人支配の様態の分析(落合雄彦論文)、ケニアでの憲法見直しプロセスを題材とした、権力闘争と制度的側面の関連の分析(津田みわ論文)、ソマリアにおける崩壊国家状況と、それに先行したシアド・バーレ政権の関係性をさぐった分析(遠藤貢論文)、南スーダンのリーダーとして囑望されながら2005年に急死したジョン・ガランの人と経歴に関する研究(栗本英世論文)、パトロン・クライアント・ネットワークの綿密な分析をとおした、ハビヤリマナ体制の分析(武内進一論文)、村落部における統治イデオロギーの受容のあり方からみる、ウフェ=ボワニの統治に関する新しい視座の提示(真島一郎論文)、である。いずれも、統治者という難しい研究対象に、独自の視点から取り組んだ力作であり、統治者研究の可能性を大きく切り開いている。

また、巻末資料には、全242人、返り咲きを含めた延べ265代のアフリカの統治者全員に関して、統治者名、生没年、肩書き・称号、おもな経歴、就任時点、就任・留任の状況、終了時点、終了の経緯をまとめた網羅的な一覧表を掲載した。比較研究のデータベースとしても、簡便な便覧としても、実用的にすぐれたものとなったと自負している。

(佐藤 章)

千葉 アジア経済研究所 2007年 vi+423p.

